

親しい参加者による日本語母語場面と中国語母語 場面における発話の重なるの分析

——テーマによるフロアの維持または移行に与える影響——

An analysis of overlapping utterances in Japanese and Chinese native tongue scenes
between intimate partner: Thematic impact on floor maintenance or changes

周 浩
ZHOU Hao

【要旨】本研究においては、日本語母語場面及び中国語母語場面での親しい関係の3人の自由会話を取り上げ、その自由会話における重なるの機能についてフロアという観点を用いて分析を行った。分析の結果、次の二点を明らかにした。まず、「フロア内での重なり」が日本語母語場面でも中国語母語場面でも「新たなフロアを築く重なり」より多いことが分かった。また、フロア内での重なりは話者が積極的に自由会話に参加し、先行発話への情報補足、自由会話の話者間の心的距離を縮め、自由会話を促進する役割を果たしていることが明らかとなった。一方、「新たなフロアを築く重なり」については、フロアの移行が成功した場合と成功しなかった場合が見られた。また、先行発話の阻害要因になるが、次話者の先行発話への興味を持たず、早く次のフロアに移行したいという気持ちを示すことができることが示唆される。

【キーワード】重なり、自由会話、フロア、母語場面

1. はじめに

コミュニケーションを通して他者と人間関係を構築し維持していくためには、情報を交換するだけでなく意味交渉を通して相互理解を深める自由会話を行う能力が不可欠である。では、自由会話における意味交渉においては発話者間でどのような発話の特徴が見られるのであろうか。自由会話における意味交渉を観察してみると、常に一人の話者の発話が完結した後、次の話者の発話が始まるといった単純な発話順番の移行を成しているわけではなく、発話の一部または全体が他の発話者の発話と重なった状態で会話が流れている場合があることがわかる。では、この発話の重なりは意味交渉においてはどのような機能を果たしているのであろうか。そこで本稿では、自由会話における発話の重なりの特徴と機能を明らかにするため、日本語母語場面及び中国語母語場面での自由会話における発話の重なりを分析する。

2. 先行研究

Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) はturnを「話す義務と権利の部分として割り当てられ、会話の構成のもっとも基本的な単位である」と定義している。また、話者交替 (turn-taking) のルールを次のように提示している⁽¹⁾。

- 1) すべてのturnにおいて、最初のturn構成単位の最初の「TRP」(turnが移行する可能性がある場所:transition relevance place)において、A 現在turnを持っている話し手が次の話し手を選ぶ場合には、選ばれた次の話し手だけがturnを取る権利と義務を持つ; B 現在turnを持っている話し手が次の話し手を選ばない場合には、その話し手以外の会話参加者全員が自分から次の話のturnを取る権利をもち、そのうち、最初に話し始めた人がturnを持つ権利がある; C 現在turnを持っている話し手が次の話し手を選ばず、かつ次のturnを取る人がいない場合、現在turnを持っている話し手がturnを持続することができる。
- 2) 最初のturn構成単位の最初のTRPで、(1A)も(1B)も適用されず、(1C)の条件のもとで現在の話者が話し続けた場合、次のTRPにおいて(1A)–(1C)が再び適用され、話者の交替が起こるまで反復される。

しかし、上述したように、実際の会話を見ると、全てのturnがTRPで移行しているわけではなく、先行発話に割り込んで、先行発話と重なる場合もある。

このような重なりはTRPを誤認した話者交替のルール違反であるとも考えられる。ではこのようなルールの違反は会話の阻害要因となるであろうか。

町田(2002)は、「初対面の会話における発話の重なりは話題となっていることが自分にとって身近であることをすばやく相手に伝える手段として用いられ、それにより、知識の共有性を確認し、共感を深める機能を持っている」と指摘している。熊谷・木谷(2010)は、互いの情報を持たない初対面の場合、予測がはずれる危険性は高くなるが、それにもかかわらず相手の発話を先取りして「共話」の形を作ろうとする行為が行われる理由の一つは、単なる相づちに比べて、先取りが相手に対して積極的な関心を表明する有効な手段にもなるからであると述べている。このように、初対面の母語場合の自由会話では、会話の重なりは知識の共有性を確認、話者の共感を深め、「共話」を作り、相手に関心を表明するなどの役割があることが示されている。

では、親しい友人同士の自由会話ではどうであろうか。藤井・大塚(1994)は、友人同士の会話を分析し、会話の重なりは話者交替のルールの逸脱といった否定的な面だけでなく、その40%以上が会話の参加者の同意や共感、関心、理解を表し、協力して会話を盛り上げるといった役割を果たしていると述べている。生駒(1996)は親しい女性同士の雑談⁽²⁾を分析し、発話の重なり機能として、会話を停滞させる、会話を促進する、また先行発話にプラスにもマイナスにも作用しない中立的な機能があると述べている。これらの先行研究によって、母語場面の親しい友人同士の会話における重なりは、妨害、中断といった否定的な面もあるものの、会話の流れを促進し、会話を盛り上げるなど会話の展開に積極的な役割、またはプラスにもマイナスにも作用しない中立な役割を果たしていることが分かる。

果たして親しい関係の3人の自由会話における重なりにおいても先行研究で指摘されたような機能があるのか。ここまで意味交渉を通して相互理解を深める自由会話における重なり機能の概観したが、実際の自由会話においては2人ではなく、つまり3人あるいは3人以上の話者が参加している場合も多いであろう。劉(2011)は会話参加者が2人の場合は現話者から発話権を取るだけであるが、3人以上の会話の場合、現話者だけでなく、他の聞き手からも発話権を取る必要がある。そのため、次話者は現話者の会話に割り込んで、発話権を取ると同時に、他の聞き手

が発話権を取らないようにするという複雑な会話のストラテジーが必要になると指摘している。また、劉 (2011) は、日本語母語場面と中国語母語場面における 4 人のクラスメート同士のトピックディスカッションに生じた割り込みを分析している。また「フロア」は話す権利を持っていると認識している時間・空間であるとされていると定義している。その結果、割り込み後における会話の展開については、日本語母語話者は割り込み話者と割り込まれた話者の間にフロアを形成し、その他の参加者はフロアを共有する傾向があるが、中国語母語話者は参加者全員が競争的にターンを取り、各自のフロアを構築する傾向があると述べている。

重なりが生じた後の談話展開に関する研究には申田 (2005・2006)、陳 (2019) などがある。申田 (2005・2006) は、日本語母語話者二者間の会話における重なりをオーバーラップと呼び、オーバーラップが現れた後に、会話参加者が自分の発話を調整する手段として「再生」と「継続」があることを指摘している。「再生」とはオーバーラップした発話部分を、そのまま (あるいは若干の語句の変更を加えて) 反復再生して自発話を完成させる手続きである。「継続」とはオーバーラップした発話部分の統語的続きとなるようデザインされた発話を行なって自発話を完成させる手続きである。陳 (2019) は、相手場面と第三者場面における中国語母語話者による発話の重なり後の談話展開について考察した。相手場面とは参加者のどちらかが相手の言語を用いてインターアクションを取る場面である。第三者場面とは参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語でインターアクションを取る場面である。その結果、相手場面では、会話参加者双方が発話を中断せず、言いたいことを続行しながら会話を円滑に進める傾向があるのに対し、第三者場面では、会話参加者双方が互いにターンを譲らず各自の意見を明瞭に述べて競争的に各自のフロアを継続するという傾向があると述べている。つまり、相手場面と違い、第三者場面では、中国語母語話者が自己表現意欲と積極的な会話参加の姿が見える。また相手場面では参加者双方は自分のフロアを継続し、共有する傾向があるが、第三者場面では参加者双方が競争的にターンを取り、各自のフロアを継続する傾向がある。

しかし、陳 (2019) は相手場面の日本語母語話者また第三者場面の相手の重なりについて詳しい分析を行っていない。母語場面の発話における重なり後の談話はどう展開するかにも言及されていない。また、その機能は会話のフロアの移行によって変化するかどうかについてこれまでの先行研究では行われていない。

そこで、本稿は日本語母語場面と中国語母語場面の自由会話で生じた発話の重なりについて自由会話のフロアの維持または移行を基準とした分類を提示し、その分類をもとに日本語母語場面と中国語母語場面におけるテーマごとに発話の重なり後にもフロアが維持される割合と移行される割合の比較することによって、発話の重なりがフロアの維持、移行に与える影響、機能を分析する。

3. 調査概要

3.1 調査協力者

本研究では日本語母語話者女性 6 名と中国語母語話者女性 6 名に調査協力をしてもらった。そ

の内、日本語母語話者はすべて日本の大学に在籍する大学生である。三年生4名、四年生2名である。中国語母語話者はすべて来日一年以上、日本の大学院に在籍する大学院生である。全てN1を取得している。したがって、上級と判断した。また、本研究では、親しい話者同士の自由会話のデータを分析するため、日常生活で上下関係のない親友で調査に参加するように依頼した。日本語母語話者は全員同じ合唱サークルに属し、プライベートでも仲のいい親友である。中国語母語話者の6名は2年以上の知り合いで、よく一緒に遊んだり、旅行に行ったりしている。このような条件で上記の日本語母語話者と中国語母語話者を集めた。調査協力者と自由会話のテーマの詳細は次節の表2で示す。

表1 調査協力者詳細

		来日年数	日本語能力
J1	大学4年		母語話者
J2	大学4年		母語話者
J3	大学3年		母語話者
J4	大学3年		母語話者
J5	大学3年		母語話者
J6	大学3年		母語話者
C1	博士課程前期2年	4年	上級
C2	博士課程前期2年	5年	上級
C3	博士課程前期1年	4年	上級
C4	博士課程後期2年	3年	上級
C5	博士課程後期1年	5年	上級
C6	博士課程前期1年	4年	上級

3.2 データの収集方法

本研究で使用している音声データはすべて2018年の夏に録音、撮影したものである。調査する際、調査協力者にデータを研究で使用する承認を得た上で、「同意書」に署名してもらい、その上で、年齢、メールアドレスを記入してもらった。データを収集するとき、まず、調査協力者に3人ずつ、二つのグループに分かれてもらった。その後、自分のグループで話したいテーマを選んでもらい、自由会話が始まる前に、協力者に「テーマについて話してください」と指示をした。その後、二つのグループにそれぞれ違う部屋で自由会話をしてもらった。部屋のなかにビデオカメラとICレコーダを設置した。撮影した際、3人がお互いの表情と体を見えるように、テーブルを半円形に作り、参加者に協力してもらった。収集の際には、協力者以外に撮影する人が一人いる。収集されたデータの詳細は表2である。

表2 データ概要

	話者	テーマ	時間
日本語母語場面テーマ1	J1、J2、J3	私のアルバイトについての話	15分2秒 (17分23秒中)
日本語母語場面テーマ2	J4、J5、J6	今までの旅行あるいはこれから行きたい旅行	15分 (18分30秒中)
中国語母語場面テーマ1	C1、C2、C3	私のアルバイトについての話	15分1秒 (20分04秒中)
中国語母語場面テーマ2	C4、C5、C6	今までの旅行あるいはこれから行きたい旅行	14分58秒 (17分52秒中)

3.3 自由会話のテーマ

本研究では、「私のアルバイトについての話」と「今までの旅行あるいはこれから行きたい旅行」の二つの自由会話のテーマを選択した。

まず、テーマ1「私のアルバイトについての話」にした理由が二つある。一つ目は今回の調査協力者全員アルバイトをしていることを事前に把握していたため、二つ目は他人のアルバイトについて詳しく分からない情報があり、その情報に対する話者のやりとりで、重なりが生じやすいと予測していたためである。テーマ2「今までの旅行あるいはこれから行きたい旅行」というテーマを選んだ理由は、予備調査時に、3人の話者に「自分の旅行」というテーマで自由会話してもらったところ、話の中に重なり回数が多かったこと、また「旅行」は日常生活でよく聞く話で、しかも自分のプライベートな話なので、ほかの話者と内容を共用しやすいと考えたためである。

3.4 音声データの処理方法

3.4.1 データの時間

本研究では、15分の音声データを分析しているが、実際のデータは15分以上収集されている。3.2で述べたように、データを収集する際、協力者以外に撮影する人が1人いるため、自由会話の最初では調査協力者が緊張している可能性があると考え、最初の直接テーマに関わらない部分を取り除いた。自由会話のテーマに入ったら、その後15分間前後の発話の切れ目で区切り、その15分間をデータとして分析した。

3.4.2 データの文字化

本研究で扱っている日本語の音声データは、宇佐美まゆみ（2011）の「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese : BTSJ）2011年版」に基づき、日本語で文字化を行った。また、中国語の音声データは、宇佐美まゆみ・肖婷婷・戴琦・高娃・李宇霞・仇晓妮（2007）「基本的文字化の原則（Basic Transcription system for Japanese: BTSJ）の中国語への応用について」に基づき、中国語で文字化を行った。文字化したデータの発話数は表3で示す。発話数の計算も「基本的文字化の原則」に基づいた。また、本田（1999）は、ある一時点において複数の話者が音声を発している時、その時点で発話の重なりが起こったということになると述べている。本研究もこの概念を援用し、参加者2人あるいは3人が同時に発した発話を重なりとする。自由会話における重なり認定に関しては、専門的知識を持つ日本語母語話者1名と筆者が会話データの一つを一緒に認定した。

表3 データの発話数

	時間	発話数	重なり回数
日本語母語場面テーマ1	15分2秒	354	127 (36%)
日本語母語場面テーマ2	15分	382	134 (35%)
中国語母語場面テーマ1	15分1秒	456	185 (41%)
中国語母語場面テーマ2	14分58秒	437	164 (36%)

表3は発話数、及び重なり の度数集計表である。それぞれの場面での発話数における重なり の生起頻度に差があるかを直接確率計算法の正確検定を行った結果、有意ではなかった ($\chi^2(3) = 3.188$, ns $p = 0.366$)。したがって、4つの場面 で発話数における重なり の生起頻度には差がないと判断できる。

3.5 本研究における重なり の分類及び発話のフロアの分け方

本研究では、参加者が何について話しているかをフロアと呼び、「フロア」という概念を用いて、重なりを「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」に分類する。その認定は専門的知識を持つ日本語母語話者1名と判断し、認定した。以下の例で説明する。[<> {}、[<> {}] 記号で囲まれている部分は発話の重なり の部分である。

「フロア内での重なり」とは、次話者が前話者の発話と同じフロアで、補足や短い感想などの割り込み発話によって、前話者の発話を補助する重なりを指す。「新たなフロアを築く重なり」とは、次話者が前話者の発話のフロアに沿わず、関係のない情報を持ち込むことによって生じた重なりを指す。

以下、例を示す。フロアは【 】で示す。

【アルバイトの年数】

34J2: もう二年半、[<もうすぐ三年、> {}]

35J1: [<そうだね、二年半> {}]

先行発話である34J2が【アルバイトの年数】というフロアで話している。後行発話である35J1が34J2のアルバイトの年数と同じフロアで話したため、先行発話の「フロア内での重なり」に分類する。

【仙台の牛タン の味】

57J5: 仙台のさ、牛タンがやばかったよ、[<美味しかった>。{}]

58J6: [<私、青葉城> {}] に行ったことがある。

先行発話である57J5の「仙台の牛タン の味」についてのフロアに対し、後行発話である58J6が「観光地」に分類される違うフロアで重なったため、先行発話の「新たなフロアを築く重なり」に分類する。

この分類に基づき、場面別、テーマ別の重なり の出現頻度の特徴を分析する。

重なり の分類については劉 (2011) の定義を援用する。劉 (2011) は発話の重なり の位置によって、重なりを「先行発話の意味が明瞭になっていない部分での重なり」と「先行発話の意味が明瞭になっている部分での重なり」に分類している。また、話者交替をする際の重なりを「自己選択によるターンの奪取」、「先行話者の発話の継続と次話者の自己選択とのずれ」に分けている。

さらに発話が重なる際の話者の言語行動の分析について、重なりを「先行話者への助け船」、「先行発話への補足」、「新たな展開」に分けている。本研究はこの分類を援用し、分析を行うこととする。

4. 調査結果及び考察

4.1 母語場面別の重なりによるフロアへの影響

日本語母語場面と中国語母語場面における重なりによるフロアへの影響の概要を把握するため、その重なりの回数を表4と表5に示す。

表4 テーマ1における母語場面別の重なりによるフロアへの影響

	フロア内での重なり	新たなフロアを築く重なり
日本語母語場面 テーマ1	96 (76%)	31 (24%)
中国語母語場面 テーマ1	102 (55%)	83 (45%)

両側検定 : $p=0.0003$ ** ($p<.01$)

表4は「日本語母語場面テーマ1」と「中国語母語場面テーマ1」における「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」の出現頻度を示したものである。場面による出現頻度の割合に差があるかを 2×2 の直接確率計算法により検定したところ、 $p=0.0003$ （両側検定）であり、その出現頻度の割合に差があることが分かった。

さらに、「日本語母語場面テーマ1」における「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」、及び「中国語母語場面テーマ1」における「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」の出現頻度に差があるかを 1×2 の直接確率計算法により検定したところ、日本語母語場面テーマ1においては、 $p=0.0000$ （両側検定）で「フロア内での重なり」の出現頻度のほうが「新たなフロアを築く重なり」の出現頻度よりも有意に多く、その頻度は「新たなフロアを築く重なり」の約3倍である。中国語母語場面テーマ1においては、 $p=0.1856$ で「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」の出現頻度には有意な差はないことが分かった。

表5 テーマ2における母語場面別の重なりによるフロアへの影響

	フロア内での重なり	新たなフロアを築く重なり
日本語母語場面 テーマ2	80 (60%)	54 (40%)
中国語母語場面 テーマ2	98 (60%)	66 (40%)

両側検定 : $p=1.0000$ ns ($.10<p$)

表5は「日本語母語場面テーマ2」と「中国語母語場面テーマ2」における「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」の出現頻度を示したものである。母語場面による出現頻度の割合に差があるかを 2×2 の直接確率計算法により検定したところ、 $p=1.0000$ （両側検定）で、母語場面による出現頻度の割合に有意な差はないことが分かった。

表6 テーマ2における重なりによるフロアへの影響

フロア内での重なり	新たなフロアを築く重なり
178	120
(0.5973)	(0.4027)

両側検定 : $p=0.0009$ ** ($p<.01$)

そこで、「日本語母語場面テーマ2」と「中国語母語場面テーマ2」の出現頻度を加算し、「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」の出現頻度の差を1×2の直接確率計算法により検定した結果、 $p=0.0009$ (両側検定) で有意であり、日本語母語場面テーマ1と同様、「フロア内での重なり」が多いことが分かった。

以上の結果をもう一度まとめると、テーマ1においてもテーマ2においても、日本語母語場面における「フロア内での重なり」が多い。この傾向は従来の研究を支持する結果となった。一方、劉 (2011) は中国語母語場面では日本語母語場面と比較すると「新たなフロア」を構築する傾向があると指摘していた。中国語母語場面テーマ1においては「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」の出現頻度に差がないという結果が示された。また、テーマ2では、中国語母語場面も日本語母語場面と同様に、「新たなフロアを築く重なり」より「フロア内での重なり」の方が多いという結果となった。これらの結果から、中国語母語場面においてはテーマによってフロアの維持と移行の特徴が異なることが示唆される。

そこで次節では、「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」はフロアへどのような影響を与えるのかを、具体的な例を示しながら、質的に分析する。

4.2 フロア内での重なり

まず、「フロア内での重なり」について説明する。3章で述べたように、これは、次話者が前話者の発話と同じフロアで、補足や短い感想などの割り込み発話によって、前話者の発話を補助する重なりである。

例1 (日本語母語場面テーマ1)

- 1J1: アルバイト、ねえ、なんだっけ
 2J2: 私、飲食。
 3J1: 飲食、塾。
 4J3: っと、ケーキ屋さん、[〈あとビデオ〉]{
 5J1: [〈ケーキ屋さんか。〉}{}

例1では、4J3の【アルバイトの職種】に対し、5J1が驚いた様子で「ケーキ屋さんか。」と発話した。しかし、5J1が発話したとき、4J3はまだ発話を終えておらず「あとビデオ」と重なった。例1のように4J3は発話「っと、ケーキ屋さん、あとビデオ」を発話する際に、明確な終止形を使っていないため、次話者J1にとってJ3の発話が2J2の「私、飲食」、3J1の「飲食、塾」のように単

語で意味の完結を持ち、すでに終了したと判断し、J3の話すスピードが落ちているところで話し始めている。J1にとっては「先行発話の意味が明瞭になっている部分での重なり」と認識された可能性もあるが、J3は発話の維持の意思を持った「先行発話の意味が明瞭になっていない部分での重なり」と認識した可能性もある。つまり、この重なりは劉（2011）の「先行話者の発話の継続と次話者の自己選択とのずれ」に相当する。しかし、この重なりは4J3がケーキ屋さんでアルバイトしていることに対して5J1が驚きを示す短い感想を述べ、自由会話に積極的に参加する姿勢であると認識できるため、自由会話を促進する役割を果たしていると考えられる。

この【アルバイトの職種】というフロアでは、それぞれが自分のアルバイトの職種を情報として提供し、それに対して短い感想を述べるというように、感情の交流を行うために重なりが生じていることが示唆される。

例2（日本語母語場面テーマ1）

15J2：高三はもう、数学も〔<やってるでしょ。〕 {<}

16J1：〔<数学もやってる。〕 {>} ははははは

17J2：すごいなあ。

例2の重なりは、15J2の「数学もやってるでしょ」の【数学塾でのアルバイト】というフロアの「数学」という情報を聞き、それが質問であると16J1が予測し、すぐに「数学もやってる」と発話したことにより生じたものである。これも「先行発話の意味が明瞭になっている部分での重なり」であり、前話者が言おうとしている内容を次話者のJ1が完結している。この重なりは前話者と次話者の協働作業で、先行発話の情報を補足していると考えられる。これは劉（2011）の「先行発話への補足」に当たる。また、次話者J1が重なった後に、「はははは」と笑った。この笑いは自分が前話者の発話を予測し、そして当たったということに対して喜びを示していると推測できる。また、この笑いは自由会話が盛り上がっている証拠にもなると考えられる。

熊谷・木谷（2010）によれば、先取りが相手に対して積極的な関心を表明する有効な手段になる。例2のように、「先取り」または2人で一つの文を完成させる「共話」によって、会話の参加者間に連帯感を生み、心的距離を縮めることにつながると言える。

例3（中国語母語場面テーマ1、日本語訳は（ ）で示す）

8C2：对，一周十二个小时。（そう、一週間12時間。）

9C1：哦-（そっか。）

10C3：那你还打这么，五天，都平均〔<每天〕 {<}（じゃ、なんでそんなに、五日間、平均で毎日）

11C2：〔<就每天两个〕 {>} 小时。（毎日2時間になるね。）

12C3：俩小时。（2時間ね。）

例3では、10C3と11C2がC2の【アルバイトの毎日の時間数】というフロアで重なりが生じた。

この重なりは例2と同様、「先行発話の意味が明瞭になっている部分での重なり」であり、「先行発話への補足」の意図で、次話者C2が前話者C3の言おうとしている内容を話したことにより生じたものである。先行発話はまだ完結していない段階で、11C2が「毎日2時間になるね。」と発話を先取りして「共話」の形を作ろうとしている。また、12C3の「2時間ね」という発話から、C2の「先取り」の予測がうまくいったと言える。これも例2と同様、2人で一つの文を完成させることで、会話の参加者間に連帯感を生み、心的距離を縮めることにつながると言える。

以上のことから、「フロア内での重なり」は「先行発話への補足」の場合が多く、また話者が会話に積極的に参加しようとする姿勢を示していることが分かった。しかし、劉(2011)による「先行話者への助け船」という機能は観察されなかった。また、「先行発話の意味が明瞭になっていない部分」での「フロア内での重なり」もなかった。

4.3 新たなフロアを築く重なり

例4 (中国語母語場面テーマ2)

121C4: 我觉得香港有些店的东西比日本的免税店还便宜。(香港のある店は日本の免税店より安いと思う)

122C5: 是吗。(そうなの)

123C6: 我也听说过, 特别是有些奢侈品。(私も聞いたことがある、特にブランド品ね。)

124C4: 我去香港的时候, 看到有 [〈好多人在买包包, 一个人〉] {} (私が香港に行った時、たくさんの人がカバンを買ったのを見たよ、一人)

125C6: [〈我去年也去香港了。〉] {} (私も去年香港に行った。)

126C4: 真的吗, 你自己去的吗? (本当? 一人で行ったの?)

127C6: 不是, 还有我爸妈。(いえ、両親と一緒に)

例4では、124C4が「たくさんの人が香港でカバンを買った」と【香港での買い物の様子】というフロアで発話しているが、そこで125C6による「私も去年香港に行った」という発話で重なりが生じている。この重なりによって【旅行先】という新たなフロアが築かれている。これは、C6がC4の「私が香港に行った時」と聞き、それに対する反応であると考えられる。しかし、この反応は「先行発話の意味が明瞭になっていない部分」で生じ、それによってC4は自分の発話権を放棄したと見える。一方、C6がこの重なりで、発話権を奪い、自分に移行させた。したがって、前話者C4にとって、この重なりは、自分の発話が中断され、阻害要因になっていると判断できる。この重なりは劉(2011)の「新たな展開」に相当する。実際、この後127C6が「両親と香港へ行った」と述べ、フロアが【同行者】に変わっている。

例5 (日本語母語場面テーマ1)

86J2: あ、有名なんだ。有名なところはマジ分らない。

87J3: 私も [〈そう〉] {}

88J1: [〈めっちゃ〉] {} おいしい

89J2：前、一緒に食べたもんね。

これはJ3がアルバイトをしている新宿のケーキ屋について話している場面である。J1とJ2は一緒にそのケーキ屋に行ったことがある。J3はアルバイトをする前は有名であることを知らなかった。

86J2が「有名であることを知らない」という意味で「有名なところ（ケーキ屋）はマジわからない」と発話し、87J3が「私もそう」と共感を示すところで、88J1が「（ケーキが）めっちゃおいしい」と重ねた。この重なりにより、発話のフロアは【ケーキ屋へのコメント】から【ケーキの感想】に移行した。J1がJ3の「私も」という発話から、J3が共感を示すと判断し、「先行発話の意味が明瞭になっている部分」で発話し、重なりが生じた。この重なりも劉（2011）の「新たな展開」に当たる。J1が【ケーキの感想】というフロアに移行させる理由は、J2とJ3が【ケーキ屋へのコメント】を発話した際、声が小さく、盛り上がっていない様子を観察し、これ以上【ケーキ屋へのコメント】のフロアは続かないと予測し、そこでフロアを変え、会話を盛り上げようとしたからだと推測できる。

例6（日本語母語場面テーマ2）

89J4：ルーローファン？ルーローファンだっけ？あれが美味しい。

90J6：あ、わかる。一回食べたことある。

91J5：え、初めて聞いた。

92J6：あれめっちゃ美味しいよ。

93J4：台湾で食べたとき、[〈何これってなった。〉}{}

94J6：[〈今度一緒にご飯行こうね。〉}{}

95J4：そうだね。あのルーローファンはどうやって作ったのかなあ、本当に感動した。

例6では、93J4の「何これってなった」という台湾での【ルーローファンを食べた感想】というフロアに対し、94J6が「今度一緒にご飯行こうね」と他の話者に食事の誘いをしており、これは先行発話のフロアを維持していない。

これは、92J6の「あれめっちゃ美味しいよ」の発話でJ6は【ルーローファンを食べに誘う】というフロアに移行しようと試みたが、J4は【ルーローファンを食べた感想】というフロアのまま維持したため、再度、【ルーローファンを食べに誘う】という新たなフロアを構築しようとして生じた重なりだと解釈できる。

しかし、95J4は「そうだね」と【ルーローファンを食べに誘う】というフロアの移行に同意を示しつつも、例4と異なり、重なった後、また「あのルーローファンはどうやって作ったのかなあ、本当に感動した。」とフロアを再び自分の【ルーローファンへの感想】に戻し、フロアを維持したと言える。94J6は「新たな展開」になるが、95J4の発話で、フロアが移行できなかった。したがって、この重なりは「新たな展開」が失敗した場合になる。J6が【ルーローファンを食べた感想】の発話を聞き、また今度他の参加者と美味しいご飯を食べようという気持ちを発したが、

J4はその誘いに「そうだね」と賛成した後、自分がまだ言い終えていない【ルーローファンへの感想】のフロアに戻した。

5. 考察

以上、日本語母語場面と中国語母語場面における自由会話の重なりにより生じたフロアの維持と移行について分析した。日本語母語場面では、どちらのテーマでも、「フロア内での重なり」は「新たなフロアを築く重なり」より多いことが分かった。つまり、フロアの維持と移行は自由会話のテーマによって、影響を受けていないと言える。また、自由会話のテーマが「私のアルバイトについての話」の場合、参加者の内、2人が飲食関係のアルバイトという共通の経験があり、それに関して知識を共有していたため、先行発話にコメントしやすかった場合もある。しかし、他の参加者のアルバイトについて参加者間で知識を共有できていない場合も多くある。自由会話のテーマが「今までの旅行あるいはこれから行きたい旅行」の場合、2人の参加者が同じ場所への旅行の経験があったり、1人の参加者が行ったことがある場所についての知識も他の2人が共有していたりする場合がある。しかし、1人の参加者しか持っていない知識の場合もある。したがって、知識の共有度は日本語母語話者が先行発話のフロアを維持するかまたは移行するかに影響を与えないと推測できる。

一方、中国語母語場面では、「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」の生起頻度の割合は自由会話のテーマによって、違いがあることが分かった。テーマが「私のアルバイトについての話」の場合、「フロア内での重なり」と「新たなフロアを築く重なり」には差がないが、会話のテーマが「今までの旅行あるいはこれから行きたい旅行」の場合、「フロア内での重なり」の方が多い。したがって、中国語母語場面において、重なりがフロアの維持または移行に与える影響は、自由会話のテーマによって異なると言える。その要因として、知識の共有度が考えられる。自由会話のテーマが「私のアルバイトについての話」の場合、参加者3人が以前は同じ職種でアルバイトをした経験がなかったため、同じ職種に関して知識が共有できていなかった。このように、中国語母語話者の3人が知識を共有していないため、先行発話にコメントしにくかったと示唆される。そのため、先行発話のフロアを維持するより、会話に積極的に参加できるように自分のフロアを構築する姿勢を示していたことが考えられる。会話のテーマが「今までの旅行あるいはこれから行きたい旅行」の場合、2人の参加者が同じ場所への旅行の経験があり、共有する知識が多い。中国語母語話者の3人が先行発話にコメントや補足などの先行発話のフロアに沿った話しをし、会話に積極的に参加する姿勢が見える。そのため、「フロア内での重なり」が「新たなフロアを築く重なり」よりも多く生じた可能性がある。

よって、日本語母語場面では、話者は自由会話のテーマ、知識の共有度に関わらず、先行発話のフロアを継続するケースが多い。これは劉（2011）が指摘した結果と同じ結果である。一方、本研究は劉（2011）で指摘した中国語母語場面の特徴と異なる結果を示している。劉（2011）は「中国語母語場面において、割り込みが現れた後、それをきっかけに、第3者が発話権を取り、自分のフロアを築き上げている。」(p.51)と述べているが、本研究の中国語母語場面のテーマ1では、

先行発話のフロアを維持する割合と移行する割合には差がなかった。また、テーマ2では日本語母語場面と同様、先行発話のフロアを維持する特徴があることが示された。したがって、劉(2011)が指摘した中国語母語場面の特徴はテーマが異なれば、異なる可能性があると言える。また、本研究で考察したように、重なりがフロアの維持と移行に与える影響はテーマに関わる参加者の知識の共有度に左右されることが示唆された。

6. 今後の課題

今回はテーマが二つだけであり、他のテーマではどのような特徴が出るかを継続的に調べる必要がある。また、日本語母語話者はテーマによる差がないかを検証することが求められる。また、今回は3者という要因については分析を行っていない。自由会話の人数は重なりと重なり後のフロアの維持か移行かに影響があるかどうかを今後の課題とする。

注

- (1) 英語の訳文は木暮(2001)を引用したものである。
- (2) 本研究では、「雑談」を「自由会話」として捉える。

参考文献

- 生駒幸子(1996)「日常会話における発話の重なり機能」『世界の日本語教育』6 国際交流基金日本語国際センター, pp.185-200
- 宇佐美まゆみ・肖婷婷・戴琦・高娃・李宇霞・仇曉妮(2007)「基本的文字化の原則(Basic Transcription system for Japanese: BTSJ)の中国語への応用について」
- 宇佐美まゆみ(2011)「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)2011年版」
- 串田秀也(2005)「参加道具としての文 — オーバーラップ—発話の再生と継続—」串田秀也・定延利之・伝康晴編『活動としての文と発話』, ひつじ書房, pp.27-62
- 熊谷智子・木谷直之(2010)『三者面接調査におけるコミュニケーション—相互行為と参加の枠組み—』くろしお出版
- 陳新(2019)「会話における発話の重なり後の談話展開について —中国人上級学習者の相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—」文教大学『言語と文化』31号, pp.89-113
- 藤井桂子・大塚純子(1994)「会話における発話の重なりについて:協力的側面を中心に」『言語文化と日本語教育』8 お茶の水女子大学日本語言語文化学会, pp.1-13
- 町田佳世子(2002)「初対面の会話における発話の重なり効果」『北海道東海大学紀要人文社会科学系』15 北海道東海大学, pp.189-210
- 劉佳珺(2011)「会話における発話の重なりについて」『言語と文化』12, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, pp.49-66
- 劉佳珺(2011)「会話における割り込み発話についての考察—日本語母語話者場面と中国語母語話者場面の対照研究—」『小出記念日本教育研究会論文集』19, pp.39-53
- Sacks, H., Schegloff, E.A. & Jefferson, G. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language* 50: pp.696-735.